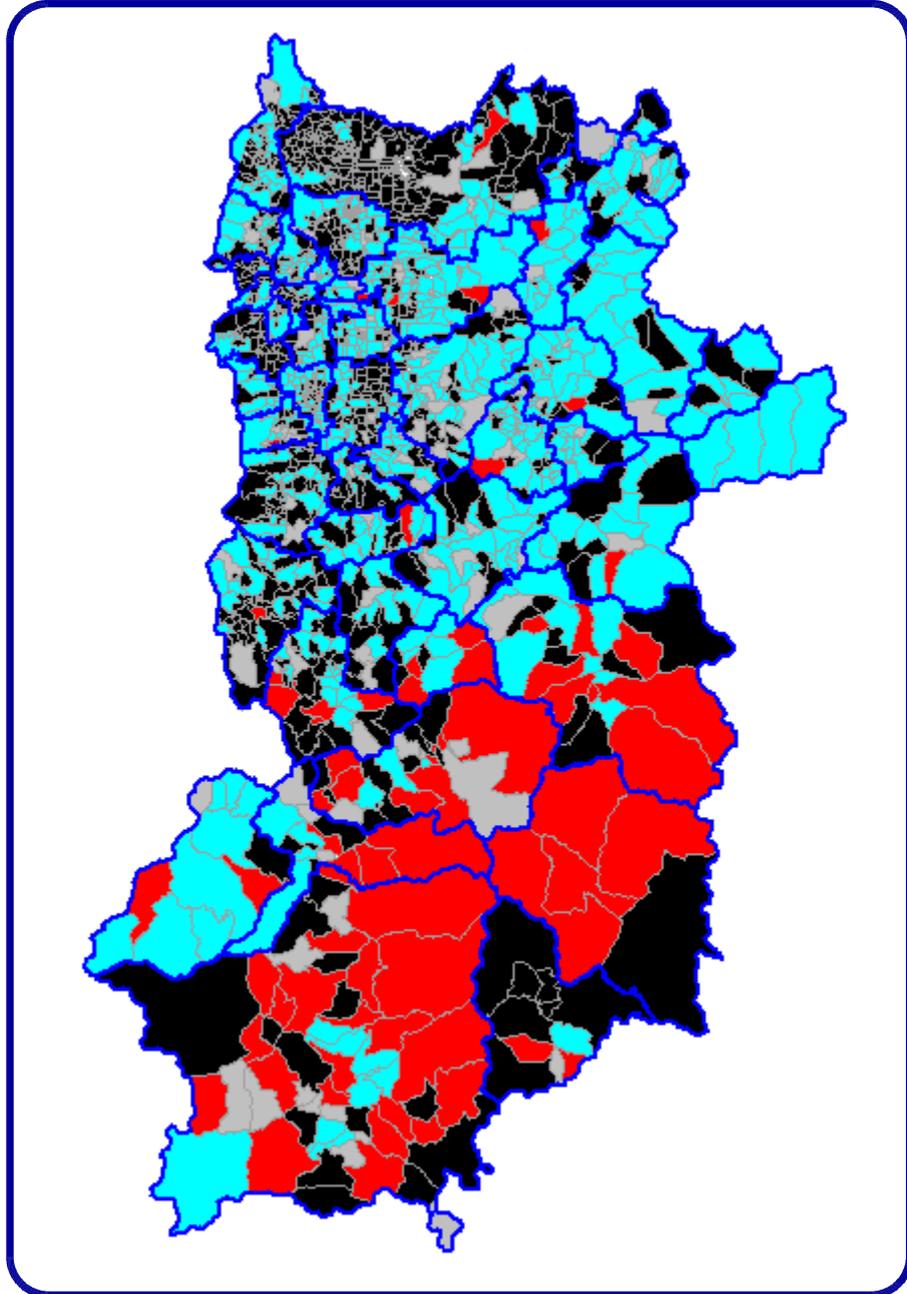


農業・林業集落アンケート調査によるツキノワグマの生息状況・被害状況 (平成22年度)

1. 平成22年度農業・林業集落アンケート調査によるツキノワグマの分布



左図は平成22年度の農林業集落アンケート調査による、ツキノワグマの分布である。

農業集落、林業集落の両方、またはいずれかでツキノワグマが「いる」と回答があった場合に「分布している」とした。回収無しには既に人が住んでいない集落も含まれている。

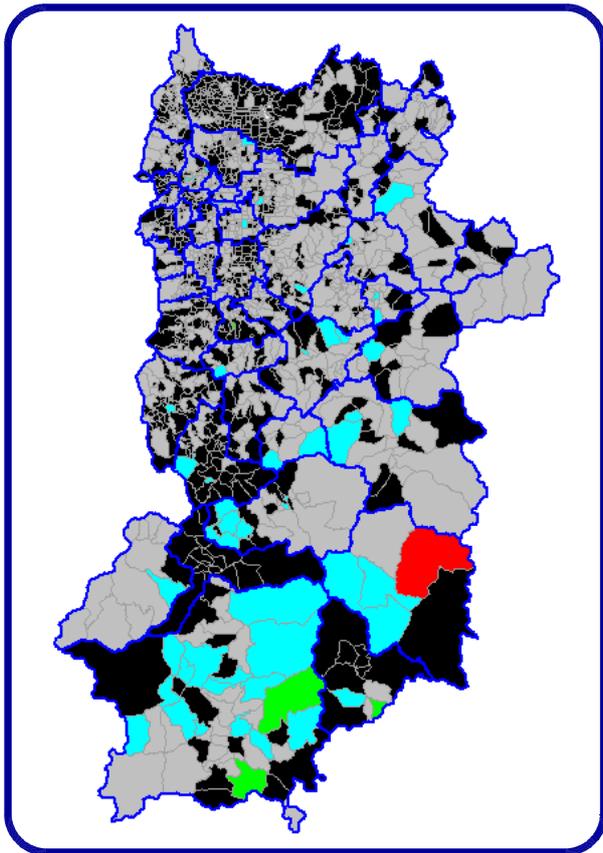
主に吉野郡や五條市以南の県南部・紀伊半島部から「いる」との回答があった。県北部からも「いる」と回答が少数あるが、ほとんどはアライグマと混同した回答である(実際の回答事例で確認)。

平成22年度

■ いる	61集落
■ いない	595集落
■ 回答無し	109集落
■ 回収無し	1043集落
全	1808集落

凡例 図中 青線 市町村界 市町村界内側の線 大字・地区界
なお、この市町村界、大字・地区界の凡例は次項以降の図も同様である

2. ツキノワグマの農業被害の大きさ



左図は平成22年度の農業集落アンケートによる、農業被害の大きさの意識調査の結果である。

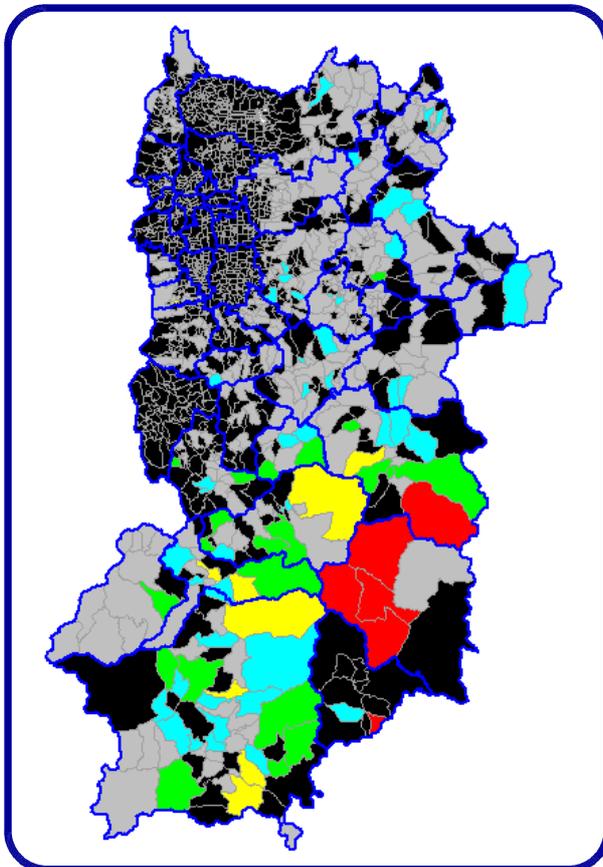
ツキノワグマが「いる」と回答があり、かつ本設問の回答があった57集落の内訳は下記の通りである。

被害が「大きい」または「深刻」と回答しているものは1集落のみである。「軽微」が約7%であった。県全体ではツキノワグマによる農業被害は非常に少ないことがわかる。

・平成22年度	
ほとんど無い	52集落(91.2%)
軽微	4集落(7.0%)
大きい(生産量の30%未満)	0集落(ー%)
深刻(生産量の30%以上)	1集落(1.8%)
回答数	57集落

・参考)平成21年度	
ほとんど無い	22集落(78.5%)
軽微	5集落(17.9%)
大きい(生産量の30%未満)	1集落(3.6%)
深刻(生産量の30%以上)	0集落(ー%)
回答数	28集落

3. ツキノワグマの林業被害の大きさ



左図は平成22年度の林業集落アンケートによる、林業被害の大きさの意識調査の結果である。

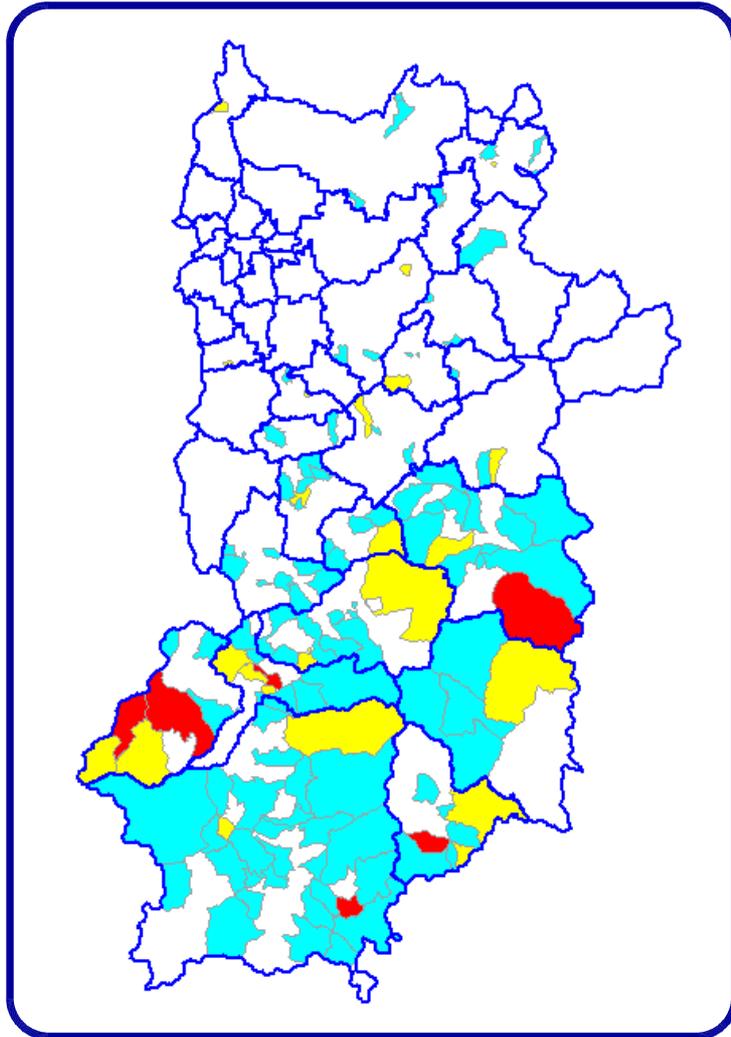
ツキノワグマが「いる」と回答があり、かつ本設問の回答があった72集落の内訳は下記の通りである。

被害が「軽微」と回答しているものが、約25%であった。「大きい」または「深刻」という回答は、ほとんどが県南部の吉野郡からの回答であり、併せて約17%であった。クマの林業被害の所謂「クマはぎ」は立木に大きな傷害を与えるため、木材としての価格を大きく損うことに留意すべきである。

・平成22年度	
ほとんど無い	47集落(57.3%)
軽微	21集落(25.6%)
大きい(生産量の30%未満)	9集落(11.0%)
深刻(生産量の30%以上)	5集落(6.1%)
回答数	72集落

・参考)平成21年度	
ほとんど無い	15集落(28.3%)
軽微	22集落(41.5%)
大きい(生産量の30%未満)	14集落(26.4%)
深刻(生産量の30%以上)	2集落(3.8%)
回答数	53集落

4. ツキノワグマの山林・奥地森林での出没動向(平成19～22年度の4年間)



左図はツキノワグマの山林・奥地森林での出没の4年間の動向である。

毎年集落毎に山林・奥地森林でのツキノワグマの出没を1. よく見る、2. たまに見る、3. あまり見ないの区分で回答を得ている。そして、1. よく見る、2. たまに見る、3. あまり見ないの回答を、「よく見る」を+1、「たまに見る」を±0、「あまり見ない」を-1とポイント化し、それを集落毎に合計し、+1以上の場合(つまりよく見るが多い場合)は赤色で、0の場合(つまりたまに見るになる場合)は黄色で、-1以下の場合(つまりあまり見ないが多い場合)は青色で各集落を色つけた。4年間で1度でも回答があった場合を集計している。

空白は調査した4年間、ツキノワグマがいない、無回答、集落に人が住んでいないのいずれかである。

ツキノワグマの山林・奥地森林での出没はほとんどないが、生息域である県南部の吉野郡の一部では頻度は高い。県北部については、分布と同様に、アライグマと混同した回答がほとんどと考えられる。

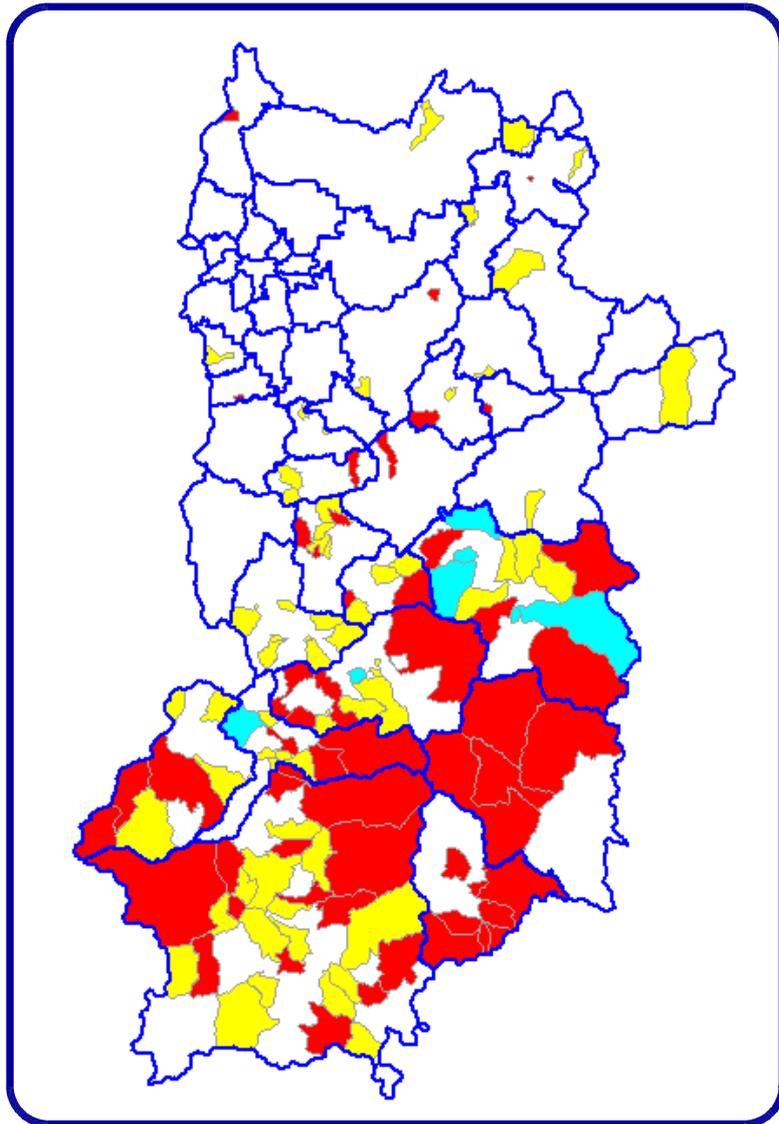
平成22年度までの4年間

よく見る	6集落(4.6%)
たまに見る	23集落(17.7%)
あまり見ない	101集落(77.7%)
回答数	130集落

参考)平成21年度までの3年間

よく見る	4集落(4.0%)
たまに見る	20集落(19.8%)
あまり見ない	77集落(76.2%)
回答数	101集落

図 ツキノワグマの林業被害意識の動向(平成19~22年度の4年間)



左図はツキノワグマによる林業被害の意識の4年間の動向である。

毎年集落毎に林業被害を前年度より1. 増えた、2. 変わらない、3. 減ったの区分で回答を得ている。そして、「増えた」を+1、「変わらない」を±0、「減った」を-1とポイント化し、それを集落毎に合計し、プラスになる場合(つまり増えている場合)は赤色で、0になる場合(つまり変わらない場合)は黄色で、マイナスになる場合(つまり減った場合)は青色で各集落を色つけした。4年間で1度でも回答があった場合を集計している。

空白は調査した4年間、ツキノワグマがいない、回答がない、集落に人が住んでいないのいずれかである。

ツキノワグマによる林業被害は県南部での意識は、ごく一部では減っているものの、回答を得た集落のうち、約43%が増えたとなった。そして吉野郡の広範囲にわたっており、ツキノワグマの林業被害所謂「クマはぎ」は増加していると考えられる。

県北部については、分布と同様に、アライグマと混同した回答がほとんどと考えられる。

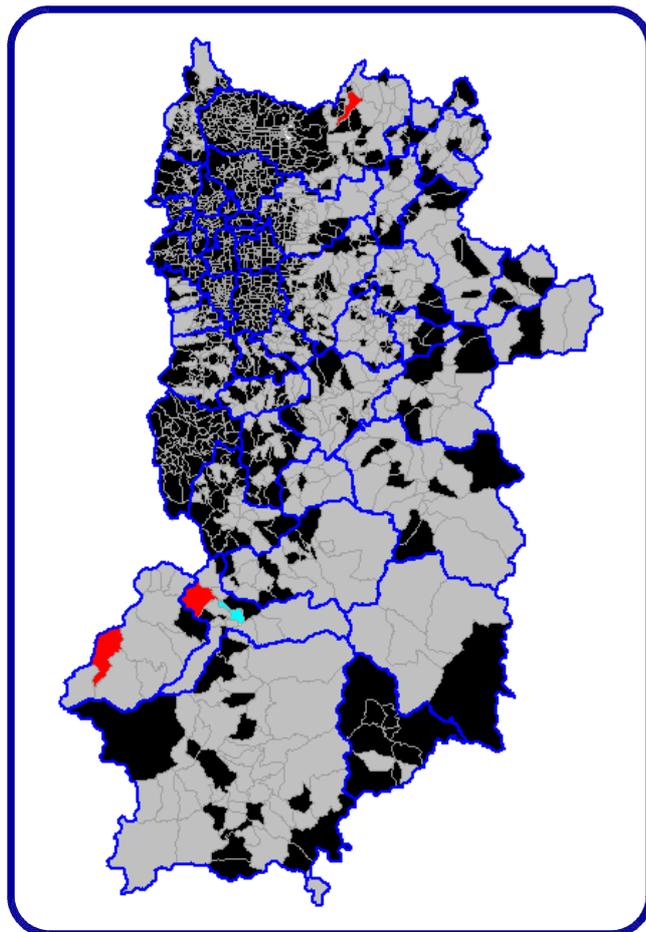
・平成22年度までの4年間

■ 増えた	53集落 (43.1%)
■ 変わらない	63集落 (51.2%)
■ 減った	7集落 (5.7%)
回答数	123集落

・参考)平成21年度までの3年間

■ 増えた	46集落 (48.4%)
■ 変わらない	44集落 (46.3%)
■ 減った	5集落 (5.3%)
回答数	95集落

図 ツキノワグマの被害対策 剥皮防止資材の効果(林業)



左図は平成22年度の農業集落アンケートによる、農業被害対策の、ツキノワグマの剥皮被害防止資材の効果の意識調査の結果である。

回答は3集落のみ得られただけであり、かつ1件はツキノワグマが生息していない県北部からの回答であった。他の動物種を混同した回答と考えられる。

- 効果があった 3集落
- 効果がなかった 1集落

各種の剥皮被害防止資材の被害防止効果については、効果は高いことが各研究機関で確認されているが、コストが高いという側面もあり、県内では中々普及していない。他府県では補助事業を実施して、効果をあげている事例がある。